「木岡哲学対話の会」2024.9.1

〈出会い〉から〈対話〉へ

自己認識と他者認識は、自他の異なりを知る〈出会い〉によって成立し、〈対話〉の実践によって進展する。風土学の根本主題である〈出会い〉と〈対話〉。その本質的なつながりを確認する。

Ⅰ　哲学と〈出会い〉

○哲学は「世界と人生の意味についての理性的反省」。→①

○哲学は、文明世界（風土）ごとに異なる個性をもつ。→②

○他との異なりが自覚されるためには、他者との〈出会い〉がなければならない。→③

Ⅱ　対話――〈出会い〉の条件

○対話（ダイアローグ）は、会話やコミュニケーションではなく、「二つのロゴス」がぶつかり合う〈出会い〉の出来事である。

○対話の目的は、立場の異なる相手と対面して、相互理解の可能性を手放すことなく、対話をつづけることにある。→④

○〈私－汝〉の対話は、隠れた第三者（彼）の介在によって進展する。

◎国家間の紛争も個人間の葛藤も、解決に至るカギは、〈出会い〉から〈対話〉への流れが成立するかどうかにある。

［資料］

① 哲学の定義

「哲学は、神話が目指したところの、世界と人生についての意味づけを、あらためて理性的反省によっておこなおうとしたものである」(野田又夫『哲学の三つの伝統』岩波文庫、2013年、45頁)。

② 哲学の多元性

「そういう意味[→①]の哲学を有するということが、文明世界の身分証明であるとすれば、およそ文明に与るかぎりの人間世界は、哲学を営むし、哲学が存在することは、その地域が文明世界であることを証拠立てるということになる」(木岡伸夫『邂逅の論理――〈縁〉の結ぶ世界へ』春秋社、2017年、7頁)。

③ 他者不在の状況

「問題は、どこにあるのか。何よりも、〈邂逅〉の大前提である「独立の二元」が成立しない状況、私とは異なる主体としての他者が、不在の状況である。それは、たがいに異なる人生観や世界観をもつ人々が、その思想をはぐくんだ地域（風土）とともに存在し、当の地域に通用する思想が、他の地域では必ずしも通用しない、という至極当たり前の理屈が、無視される事態を招いている」(同書22頁)。

④ 邂逅と対話

「とはいえ、〈対話〉と〈邂逅〉は、同じことではない。出会った双方が、たがいの異なりを認め合いつつ、相互承認、相互理解へと歩み出すための手続きが、〈対話〉であると言えば、意味の違いが明らかになるだろうか。同じことを、他者とぶつかり合った衝撃、驚きが最初にあって、それを緩和する方法が対話である、と言い換えてもよいだろう」(木岡伸夫『〈出会い〉の風土学――対話へのいざない』幻冬舎、2018年、10頁)。

【概要】

〇後期の「哲学講話」シリーズ（5 回）の趣旨

・前期最終回（7.7）《自己と他者》で、〈自己〉の成立条件が〈他者〉との出会いにあることを説明した。後期初回は、それを承けて、「〈出会い〉から〈対話〉へ」を主題とする。

・〈出会い〉〈対話〉は、風土学の中心テーマ。後期の講話は、《風土学のいま》を語りたい。

・私は現在、風土学のキーワード〈あいだ〉に近い〈中〉（中間的なもの）を考えている。最近手がけている論文のテーマは、「中のロゴス」――近刊予定。

・「哲学対話」の発表テーマは、各自の関心次第で、まったく自由。前期のように、「講話」と「対話」の内容を結びつけるプログラムにはしない――今回は、たまたま一致。

Ⅰ　哲学と〈出会い〉

〇哲学は「世界と人生の意味についての理性的反省」。→①

〇哲学は、文明世界（風土）ごとに異なる個性をもつ。→②

〇自他の異なりが自覚されるためには、他者との〈出会い〉がなければならない。→③

『邂逅の論理』（2017 年）で説いた〈出会い〉（邂逅）の意義を、三点に要約。野田又夫は、哲学イコール philosophy という先入観を打ち破り、三つの文明地域（地中海世界、インド、中国）すべてに哲学の伝統が存在すると主張した。それぞれの哲学の個性は、思考のツールである論理（論証法・弁証法・修辞法）の違いとして表れている。

私はこの考えに力づけられ、異なる世界同士の〈出会い〉を自分の学問のテーマとしてうちだした。フランス留学（2002 年）以後、他者との〈出会い〉を問題にする学問は、風土学以外にないことを自覚し、その理論形成に努めて今日に至る。

Ⅱ　対話――〈出会い〉の条件

〇対話（ダイアローグ）は、会話やコミュニケーションではなく、「二つのロゴス」がぶつかり合う〈出会い〉の出来事である。

〇対話の目的は、立場の異なる相手と対面して、相互理解の可能性を手放すことなく、対話をつづけることにある。→④

〇〈私－汝〉の対話は、隠れた第三者（彼）の介在によって進展する。[←説明略]

〈対話〉の基本は、自他の異なりを知ること――対話がなければ、〈出会い〉はすれ違いに終わる。ロゴスとロゴスとのぶつかり合い（dialogos）から、何が生まれるかは予測しがたい。相互理解をめざして、言葉を交わし続けること、そのことに対話の意義がある。

第三点は、旧稿「〈二〉と〈三〉のあいだ――対話の条件」(2022 年)に譲る。